

500hPa 高度場における北半球夏のテレコネクション

稲田 智子

テレコネクションとは、地球上で数千km以上も離れた地点間の気象・海象変化に互いに関連が見られることとされている。このテレコネクションについて、過去にさまざまな研究が行われているが、系統的な研究としては北半球の冬を対象としたWallace and Gutzlerが著名である。彼らは、NMCのデータより、1962/63～1977/78年の冬季(12・1・2月)、計45ヶ月の北半球の地上気圧および500hPa高度を使用して同時相関を取り、北半球の冬にみられる5つのテレコネクション(東太平洋、北半球・北米、西大西洋、西太平洋、ユーラシア)を示した。

一方、Wallace and Gutzlerが論じなかった夏のテレコネクションについては、気圧幅が小さいこともあり、気圧分布図によってはっきりした同定がされていなかったが、最近では日本の気候を論ずるうえでも、夏におけるテレコネクションには注目を要する。先行研究によれば、日本の夏には大きく分けて3つのテレコネクションが関わって

いるとされている。1つはPJパターンなどの南からのテレコネクション、2つはアジア大陸上の亜熱帯ジェットに沿って伝播するロスビー波によるテレコネクション、3つは寒帯前線ジェットに沿って西から伝播するロスビー波によるテレコネクションがあるという。これらのテレコネクションパターンが複雑に絡み合って日本の冷夏・初夏に影響を与えていると考えられるが、それがどの程度寄与しているのかはまだ明らかにされていない。各テレコネクションに関係する要因などがわかれば、今後は予測も可能になるだろう。

本研究では、まず月単位における冬のデータを使用して、Wallace and Gutzlerの再現性を確認したうえで、月単位の夏のデータを使用して解析を行った。その後、半月単位における北半球夏の500hPa高度の季節進行の経年変化の相関関係から、相関の強い遠く離れた2地点を探すことから始め、季節変化を除いた夏のテレコネクションについて論じた。

日本社会に生きる「在日」コロンビア人：とある「カリブ料理店」を通してみるエスニック・コミュニティと生活世界

上田 まゆ子

「在日」外国人は、特定の場所に集住し、可視的なエスニック・コミュニティを形成する傾向がある。しかし「在日」コロンビア人のような少数派の場合は、各地に分散するため、可視的レベルでのエスニック・コミュニティは成立しにくい。従って彼らは、特定の場所に集住するよりも、特定の場所に集い、「たまり場」を作るという方法で、自分たちの結節点を持つ。そこで本論文では、ある地域一帯の「在日」コロンビア人のエスニック・コミュニティの場となっている、「在日」コロンビア人女性が経営する「カリブ料理店」での2年間の参与観察、ライフストーリー調査から、「在日」コロンビア人の生活世界を描き、彼らにとってのその場所の意味を考察した。

その結果、「カリブ料理店」という場所が、「在日」コロンビア人にとって単なるレストラン、憩いの場というだけでなく、日本で生活していく上で重要な「セーフティーネット」の役目を果たしていることが分かった。「コロンビア的空間」に囲まれることで、コロンビア人であるというアイデンティティを再認識したり、日本で生きていくためのライフラインともなる情報を得たり、ビジネスチャンスを広げたりと、少数派の彼らにとっては重要なソーシャルネットワークの場となっている。特に言葉の問題を持つ人たちにとっては、スペイン語で話すことが当然とされ、母国語で悩みを相談できるその場所は、「東の間のマジョリティー」として店の外の日本社会を忘れられる貴重

な存在となっている。

こうした「マジョリティでいられる時間・空間」は、日本社会でマージナルな位置に置かれが

ちな彼らにとって、唯一、日本にいながらも日本を排除でき、「主体」としての自分自身を取り戻せる切要な場所なのである。

民間日本語教室における在日外国人児童生徒への支援の現状と課題

岡村 聖子

在日外国人の子どもたちは、自分で必要性を感じなければボランティアが用意する子ども向けの日本語教室（学習補充教室）には通ってこない。つまり用意されている支援の場に出てこないといえる。外国人の子どもは、疎外された家庭環境や、学校における教育支援の体制が不十分な理由により、地域の民間日本語教室に「依存」しなくてはならない現状がある。ボランティアは、地域の民間日本語教室を頼りに、外国人児童生徒が地域社会に適応・溶け込むよう、継続的に努力をしている。ニューカマーの子どもたちにとって、民間日本語教室で学ぶ・交流をするということは、学習面の向上や、学校生活を円滑にする可能性があるというだけでなく、子どもの成長に伴うコミュニ

ケーションの言語能力を身につける意味をもち合わせているといえる。子ども向けの民間ボランティア日本語教室では、地域の事情や、在日外国人が抱える事情、現代の日本社会を理解するうえでも、理解に役立つ場所である。また、子どもへの教育の機会・サービスの提供の場としての子ども向けの日本語教室は、外国人の子ども「自己表現の場」となり、そして、友人やボランティアとの「対話」（コミュニケーション）を通して、子どもの「精神的な支え」・「学問（意識）向上の場」となっている。そのような民間日本語教室に、積極的に通う子どもへの支援は、長期的向上的支援が必要となる。

在日台湾人女性の生活時間・空間及び社会的ネットワーク

ファンズイン

本論文は在日台湾人女性の生活時間・空間及び社会的ネットワークについての考察である。研究方法としては時間地理学の概念を用いて、生活時間調査の手法で、6人の在日台湾人女性に対して、質的訪問調査を行った。在日台湾人の生活実態や社会的ネットワークの一部を明らかにすることが研究の目的である。

台湾人は中国との政治的不安定、より良好な生活・教育環境を求めるなどの動機で、海外移住する者が多いという。その中、日本に移住した者の特徴は、女性が圧倒的に多く、経済的に依存性が強い。移住の動機として親族の呼び寄せ、国際結婚で移住した人が多いという。

在日台湾人女性は日本に移住し、生活していく過程の中で、いろいろな困難にぶつかる。言葉の壁、就職の困難さ、人間関係の希薄、差別、社会資源の少なさなどに困る人が多い。在日台湾人女性の生活時間の配分は2次活動が一番長く、3次活動はやや短い。生活空間は能力制約（言語、

交通手段）、接合制約（仕事、子育て）、孤立的な社会的ネットワーク（人間関係）などの要素に影響され、家と家の周りの狭い空間となる。

在日台湾人女性の生活空間が広がらない理由は、社会的ネットワークが発達しないことに強い関連性がある。孤立的な社会的ネットワークの成因は、内在要因と外在要因に分けられる。お互いに因果関係になっている。内在要因としては、在日台湾人女性の社会的根とワークを発展させる態度は、消極的・被動的、意欲が低い。外在要因としては、物理環境の厳しさ、社会資源の少なさが考えられる。

在日台湾人女性の生活満足度は日本語のレベル及び在日年度、職場の有無、生活空間の広さ、社会的ネットワークの発達度に影響される。在日台湾人女性の孤立的な生活環境を改善するために外国人政策の充実、台湾人ネットワーク情報の統合・発信が望ましい。